

『拾遺集』作者表記の怪——橘忠幹は『伊勢物語』生成論の一角たり得るか——

後藤 祥子

『伊勢物語』十一段は、『拾遺集』との歌の一致によって、物語の生成・増益の有力な根拠とされる。すなわち、

むかし、男、あづまへゆぎけるに、友だちどもに道よりいひ
おこせける。

忘るなよほどは雲井になりぬとも空行く月の巡り会ふまで
という短い章段の歌が、『拾遺集』巻八に次のように見えることを云う。

橘のただもとが人の娘に忍びて物云ひ侍りけるころ、遠
き所にまかり侍るとてこの女のもとに云ひつかはしける
忘るなよほどは雲井になりぬとも空行く月のめぐり合ふまで

(470)

諸注でもこの歌は現在、『拾遺集』↓『伊勢物語』という扱い
で、田村俊介氏などもこれを、生成・増益の下限の明確な根拠

とみて次のように云われる(『伊勢物語三段階成立論統貂』(『富
山大学人文学部紀要31』1998・8)。

一部の章段(小段)は『古今集』前後、橘忠幹の「忘るなよ
ほどは雲井に……」を借りて作った第十一段が十世紀後半であ
るのは衆目の一致するところであるから、半世紀に亘って人々
が生成・増益し続けた事実は、その理由とエネルギーを問う前
に、まず事実として認めねばなるまい。

わたくしもまた、これまでそのように思ってきた。それがこ
こへきて、拾遺集の表記を眺めているうちに、急に不安になっ
てきたのである。拾遺集は後撰集などと違って、形式を重んず
る集だと思われるのに、何故この歌に限って、作者名を定
位置に書かないのだろう。それは本来この歌が橘忠幹の歌でな
く、典拠のある古歌、あるいは伝承歌を彼が利用したというよ
うな事情を示しているからではないのか。

作者名が詞書の終わった後の定位置に来ず、詞書き中にある
例は、勅撰集に無いわけではない。『古今集』巻一4番歌の「二
条のきさきの春のはじめの御歌」や『拾遺集』巻二十一346
番「光明皇后、山階寺にある仏跡にかきつけたまひける」だの、

その次の1347番「大僧正行基よみたまひける」、また1350番歌の「聖徳太子」、あるいはまた『後拾遺集』巻二十巻頭1160番歌の「斎王みづから託宣して」(伊勢神宮の正身つまり天照大神)や1103番の貴船明神の場合(これは詞書きでなく左注だが)などがそれに当たるとは。これらは后妃や神だからだとして、では神と后の中間に位置する天皇はどうかと云えば、これは詞書中に書かれる場合『古今集』21「仁和の帝」や348「仁和の御時」また90番歌「ならのみかどの御うた」、『後撰集』6「院」と、定位置に「御製」とある場合(『後撰集』278「延喜御製」や次の279「法皇御製」)の双方がある。これを理由づけるとすれば、天皇の御製は正史上に明らかにされるのに対して、神の歌は姿を隠して伝えられ、后の歌も天皇の歌と違って作歌の場が不分明だというような理屈であるうか。后だからといって常に詞書き中に書かれるわけではなく、『後撰集』巻十五1080や十六1156の「嵯峨后」などは定位置にある。いずれも典拠が明らかというわけではないけれども(嵯峨御集のようなものに載るわけではないけれども)古今集の二条の後の歌や拾遺集の光明皇后の歌よりは場面や作歌事情という点で個人に帰着する性格の強い歌、ということであろうか。ところで二条の後のこの歌には言及も多く、歌の置かれた位置からいって、3番「題知らず・読み人知らず」の条件が本来そのまま5番歌までかかっていたのを、いったん廢后に

された二条後の名譽回復の氣運につれて作者名が浮上し、そのため改めて5番歌にも「題知らず・読み人知らず」が付けられたのではないか、という解釈もある(大養廉氏「鶯の氷れる涙——二条後の一首をめぐって——」『国語国文学研究』18・19号昭和三十六・三三)。これに対して片桐洋一氏『古今和歌集評釈』は、二条後の名が『古今集』に載るのはこの4番歌だけでなく、他にも四例あり(8・293・445・871)、4番歌以外ではその名を消すと詞書きが意味をなさなくなる所から、天慶六年(九四三)の名譽回復を待つまでもなく、古今集成成立の当初から、詠歌当時の呼称である「二条后」の名を載せることはタブーではなかった、とされる。従うべきであろう。しかしこの大養氏の問題提起ははからずも、『拾遺集』の忠幹歌の作者名表記の問題を考え直させるきっかけにもなる。と言うのも、この歌の直前は読み人知らずであって、

大江為基がもとに、売りにまうできたりける鏡の包みたりける紙に、書き付けて侍りける

読み人知らず

今日までと見るに涙のますかがみ馴れにし影を人に語るな

(469)

その伝で行けば、470番歌の定位置に作者名が無いという

ことは、これも読み人知らずの続きとみなすことも出来、その場合、忠幹が女に送った「忘るなよ」の歌は、場合に即応した古歌という解釈も成り立つと云うわけである。

実際、人々は常に自作の和歌でやりとりしていたわけではなく、場合に即応した古歌を利用する場合は少なくなかったと思われる。『源氏物語』『空蟬』の巻末歌は、伊勢の御か『源氏』の方がオリジナルか、説の分れる所だが、『枕草子』作者が女主人を讃えるのに『古今集』巻一の太政大臣良房の古歌を一語換えて利用したのはよく知られた話(二〇段「清涼殿の丑寅の隅の」)。

と、ここまで述べてきて、今度は忠幹作者説を側面から補強するような『拾遺集』作者表記の異例さを証する一例にぶつかった。

巻十五恋五の次のような例、

円融院の御時、少将更衣のもとに遣はしける

限りなき思ひの空に満ちぬればいくその煙雲となるらん

(971)

御返し

空に満つ思ひの煙雲ならばながむる人の目にぞ見えまし

(972)

本来なら前者に「円融院御製」後者に「少将の更衣」の作者

表記の付くはずの所。また巻二十哀傷には、

としのぶが流されける時、流さるる人は重服を着てまかると聞きて、母がもとより衣に結び付けて侍りける

ひとなしし胸の乳房をほむらにて焼く墨染めの衣着よ君

(1294)

いずれの例も、作者名が定位置に無いが、それに先立つ作者名が及ぶものでないのは明らかである。同じく哀傷の巻の、

謙徳公の北方、二人子ども亡くなりて後、

あまといへどいかなるあまの身なればか世に似ぬ潮を垂れ渡るらん

(1298)

も同様。これなどは前が「読み人知らず」であるけれども、この歌の作者は少将義孝らの母恵子であるのは云うまでもない。どうやら作者表記に関しては、一般にしどけないと云われる『後撰集』よりも、『拾遺集』の方がよほど破格なのだと見える。かくて問題は振り出しに戻り、『拾遺集』忠幹歌から増補『伊勢物語』へという定説は、私のなかで再確認されることになった。このようなことはすでに先学がお述べになっているのかも知れない。